

# 擦弦楽器の歴史



吾輩は擦弦楽器である。  
名前はいっぱいある。どこで生れたかほとんど見当がつかぬ。モンゴルの馬頭琴なのか、セイロンのラヴァナストロンなのか、エジプトのラバーブなのか……。

バイオリンのような擦弦楽器は難しい構造をしているわけではないので案外と簡単に作ることができる。だから、世界中いたるところで作られた。その辺の材料を使って気まぐれで作っても音は出る。良い音か悪い音かは、それぞれ解釈が違うのでこのさい関係ない。とにかく音は出るし、音階だって自由に演奏できる。地域固有の音階を出すのにも楽器そのものの製作上の制限はない。

作った楽器の名前は勝手につけてもいいし、どこかの国で使われていた名前をそのまま使ってもいい。だけど、そのままの名前を使っても母国の発音にするとちょっと違ったりする。訛る。

文字にする時は自国の文字やスペルで書く。読むときは勝手に自分流に読んで発音してしまう。

こんなわけで、同じ名前のはずが違う呼び名に変わってしまったり、形が違ったり、皮をはってみたり、弦の数を適当に増やしてみたりで世界中で名前と形が入り乱れているという状態になっている。

さて、その歴史。馬のシッポの毛で弦をこすって音を出すという実用新案を発見し、それを楽器として使い出したのは「いつ」「どこで」ということだが、これに関しては一切不明だ。別に、どこのだれが擦弦楽器を使い出したかなんてのは、判ったところで人類にとって何かいいことがあるわけでもないし、バイオリニストの上達が早くなるわけでもない。とはいえ、せつかくなので色々と文献を調べてみた。

## 馬頭琴ではないか

モンゴルの馬頭琴(モリンホール)ではないかという説。モンゴルでは馬との生活が長い。8世紀の遺跡から発見されている。馬頭琴は弓だけでなく弦も馬のシッポを使っている。

## ラバナストロンかも

4千年以上も前にセイロン(今のスリランカ)のラヴァナ王が発明したのだという。けどもラヴァナ王そのものの歴史的存在が怪しい。

## ラバーブだと思われる

ここは地の果てアルジェリア・・・やエジプト、さらに東南アジアまでラバーブとかルバブという名称で伝わっている。

擦弦楽器の起源やいかに、ということなんだろうけど、どうしてある特定の箇所で発生した楽器であるという大前提があるのかな。世界中ありとあらゆる場所で弦をこすって音を出すアイデアが生まれたはずだと思うのだけど、いかがなものだろう。

## いろいろな擦弦楽器

### 牙箏 アジェン



箏(そう/こと)の形をしているが、擦弦楽器だ。  
松脂を塗ったレンギョウの棒でこすって演奏する。高麗時代(10世紀中ごろ—16世紀)に中国から朝鮮半島に伝わったといわれている。

### エスラジ Esraj



バングラデシュおよびインドの西ベンガル地方の弓奏弦楽器。1本の木からつくられた共鳴胴の上は薄い皮で覆われ、指盤上には金属製の可動のフレットがある。弦は金属製で、旋律用に4本、ドローン(持続低音)用に2本、さらにその下に共鳴弦として11~17本が張られている

### ガドウルカ Gadulka

ガドウルカはブルガリアの民族楽器。  
メロディを弾く弦は3本。その下に10本の共鳴用の弦が張りめぐらされている。  
(共鳴弦を持たない楽器もある)



# いろいろな擦弦楽器

## きょうこ 京胡(ジンフ)

中国伝統戯曲である京劇の伴奏で使われる楽器。  
棹、共鳴胴、弓は総て竹が材料。共鳴胴には蛇の皮が張ってある。弦は2本。



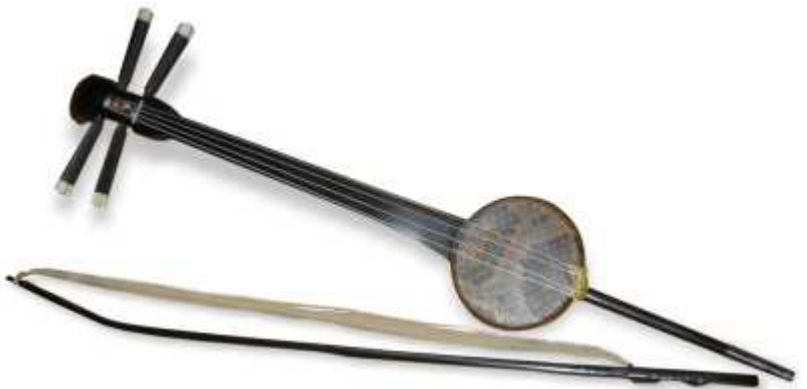
## キット Kit

1700年ごろの古い楽器。イギリスではキットと呼んでいたが、ヨーロッパ各地で使われており、それぞれ製作者や地域によって名称は様々。イタリアではポケッタ、フランスではポシェットとなり、日本人用の名称ならポケットバイオリンとなるだろうか。  
カセットレコーダーもCDも無かった時代なので、ダンスの教師はこの小さなバイオリンを携帯していたという。



## クーチョー 胡弓

胴は木をくりぬいたり、またヤシの実を使うこともあるという。三線(さんしん)と同じく蛇の皮を貼り付けてある。もともと弦は3本だったようだが、4本弦のクーチョーが普及している。  
弓の毛はゆるゆるであるが、心配ご無用。弓を持つ右手の指でギュッと張りつめながら弾く。バイオリンのように弓で角度をつけて弦に当てるのではなく、楽器本体をクイクイ回す。



# いろいろな擦弦楽器

## カラデニズ・ケメンチェ KaradenizKemence



カラデニズ・ケメンチェはトルコの擦弦楽器(弓奏楽器)の総称で黒海沿岸の民俗舞踊の伴奏によく使われる。名前の由来はペルシア語のケマン(弓)からきていて、弓の毛はバイオリンなどと同じく馬のシッポ。

## コブズ Kobyz

コブズはカザフスタンの弦楽器。胴の膝に挟んで弾く。木をくりぬいて、ブリッジの部分に音響用の皮を張っており、ネパールやインドのサーランギととてもよく似た作りをしている。コブズとサーランギは同じ祖先を持つ楽器だろう。



## サリンダ Sarinda

サリンダは弓で弾くインドの楽器。歌の伴奏として使われることが多い。チーク材を深く削ってあり表板がなく、はしっこの一部に羊の皮が張っており、ブリッジが配置されている。



# いろいろな擦弦楽器

## サーランギ Sarangi

サーランギはインドやネパールの弦楽器。この写真はインドのもの。弦を擦って(こすって)音を出す。さすがインドというか、シタールと同じく共鳴弦がいっぱい張ってある。

サーランギは、動物の皮や腸を張り、馬の尾毛で擦るので「菜食主義」のヒンズー教徒には好かれる楽器ではなかったようだ。



## ストロー バイオリン StrohViolin

まだ高機能な録音機器が無かった時代。蓄音機に録音するのに大きな音で指向性の強い楽器が必要だった。その要求に応えたのがこのストローバイオリン。

共鳴胴の代わりに缶詰の蓋のようなアルミ板を使っている。拡声のためのホーンはなぜかカッコイイ。

管がついているので飲み物のストローのことかと思ってしまいかもしてないけど straw ではなく stroh だ。イギリスのオーグスタス・ストローという人が考案し、その息子さんのチャールズが製造を始めた。



## ディルルバ Dilruba

ディルルバはインドの弓で弾く楽器。サーランギとエスラジの特徴を持っている。共鳴弦を何本も張りつめてあるのはインド楽器の特徴。



# いろいろな擦弦楽器

## トロンバ マリーナ Trombamarina

1本の弦。弓で弾く。1.5メートルから大きいな物では2メートルほど。構え方はチェロのようだけど2メートルもあるようなのは座っては無理。立って演奏する。

この楽器の特徴は、バイオリンなどのフラジオレット(ハーモニクス)のような奏法で、ヘッドに近い方を弓で弾くこと。倍音だけで演奏するわけだ。



## ニッケルハルパ NyckelHarpa

ニッケルハルパはスウェーデンの楽器。Nyckel(鍵盤)Harpa(ハープ)なので日本語訳すれば「鍵盤」とでもいうところか。バイオリンのように弓でこすって音を出す弦と、共鳴させる弦が張られている。



## ハーディ ガーディ Hurdygurdy

ハンドルを回すと中に仕掛けられた円盤が回るようになっている。円盤にはロジンが塗ってあり、張られた弦の下をクルクル回りながら弦をこする。円盤はバイオリンの弓と同じ役目だが円なので終わりが無い。音程は鍵盤で弦を押さえつけることにより変化させる。



## 弓

その昔「弓」は本当に「弓」の形をしていた。  
張力を強くということで、だんだんと反り返った形になり、現代の弓は長さも精一杯長い。

### 馬のシッポ

毛の部分は馬のシッポの毛。モンゴルあたりの白馬のシッポがいいようだけど、べつに白馬でなくても音は出る。釣り糸(テグス)でも大丈夫なようだが、馬のシッポは細かいギザギザ(キューティクルかな)があって、やっぱりこれが、まあ、ちょうどいいアンバイのようだ。

### 松脂(まつやに)

馬の毛には松脂を塗る。  
松の樹液を精製して作ったもので「ロジン」という。粉にしたものは、床の滑り止めや野球のピッチャーのロジンバックに入れてある。  
バイオリンなどの弦楽器用には4センチほどの大きさのカタマリで、ちょうど「べっ甲飴」みたいな半透明で甘そうである。



左が古い時代の弓、右が現在の弓

## 弦

弦を持たない弦楽器はない。当たり前であるが「弦」あってこそその弦楽器である。ところが、案外と弦楽器は本体の作り方ばかりに話題がおよぶ。

例えばバイオリンなら木材の原木の種類や産地、乾燥の年月、秘伝のニス調合、ボディの形や容積・・・などなど。

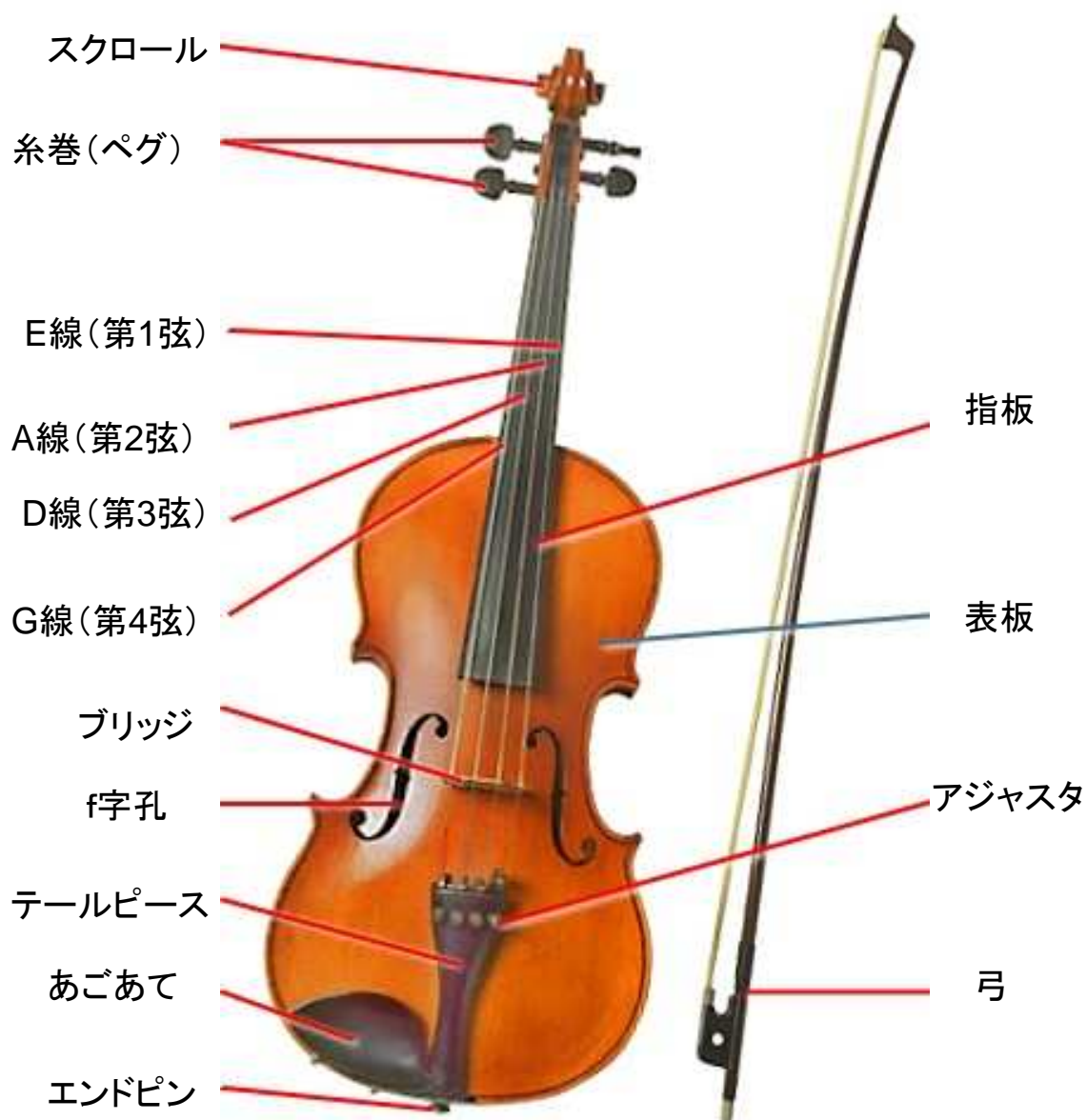
ギターでも同じようなものだ。表板はどこそこのスプルース材だから明るくキレの良い音だ・・・とか。私なんぞはそんな細かい事までを気にしてギターの音を聴いたことがないので違いがよく分からなくても、いずれにしても弦によって音質が全く違うことを抜きにして語っているようだ。

音の良し悪しは、素材と楽器職人のノウハウや技術に大きく左右されるだろうし、また現代の優れた音響科学や加工技術をもって最良音質の楽器が作られている。なるほど そうなんだけれども、なぜ弦が音質を決めることの話が少ないのだろう。特にスチール弦やナイロン弦は、個人の腕の良さだけでは到底作り上げることのできない高い技術が集積されている。楽器作りの名人は本体の木材の加工技術であり、それはそれで立派であるのだけれども、金属加工や化学繊維の技術は、個人が一生懸命勉強して修行を積んだとしても作ることができない。素材を分子レベルまで研究し尽くしてモノを作る科学者・技術者のほうが確実に偉いと私は思う。ストラディバリウスも「弦が無ければただの箱」である。



バイオリンの巻線(第4弦 G線)の例  
ナイロンなどの化学繊維を束ね、鉄・ニッケル合金の丸線を巻いてある。さらに、銀(またはアルミ)の平線が逆方向に巻かれている。

## バイオリン 各部の名称



私家版楽器事典

[http://saisaibatake.ame-zaiku.com/gakki/gakki\\_main.html](http://saisaibatake.ame-zaiku.com/gakki/gakki_main.html)